

わからせおじさん
不良少女をわからせる

仙川 タマキ



この作品はフィクションです。実在の人物・団体とは関係ありません。
また、今作品に登場する人物はすべて18歳以上です。

有田 ツトム

ユウの幼馴染
ユウからよく金をせびられている。
ユウに逆らえず、しかたなく金を渡している。



八代 ユウ

ツトムの幼馴染
昔はツトムとも仲が良かったが、
悪い友達とつるむようになり、変わってしまった。
ツトムをたびたび恐喝している。



わからせおじさん

渡瀬 精司

一日目 校舎裏



おじさんは、いつものように監視カメラのチェックをはじめた。

非常階段のそばに配置してあるカメラに男子と女子生徒が立って、何やら話している。

音声はない。

しかし、その表情からカップルがいちゃついているわけではないことはわかる。

見てみると、女子生徒の表情がどんどんがきびしくなり、とうとう男子生徒に手を出した。

男子生徒は、やり返さない。

女子生徒がもう一発殴った。

男子生徒は、諦めたようにカバンから何かを取り出した。

財布のようだ。

男子生徒は女子生徒に金を手渡した。

「これは……」
オジサンは微笑まずにはいらなかった。

恐喝の決定的な証拠だ。

これは使える。

オジサンは行動を開始した。



「用務員のオッサンが何の用だよ」

女子生徒は明らかに警戒している。

ムリもない。おじさんは身長180センチ体重100キロオーバーの巨漢である。

おじさんは、スマホを取り出し、動画を再生した。

例のカツアゲの一部始終が再生される。

「ふざけんな！なんで勝手に動画撮ってたんだよ！」

「監視カメラのチェックはおじさんの仕事のひとつだからさ。そりゃチェックするよ、八代ユウちゃん」

「なんで私の名前知って……」

「調べさせてもらったよ。警察に届け出ないといけないし。それでわかったんだけどさ、ユウちゃん留年するかもしれないんだね」

「だからなんだよ。オッサンに関係ないだろ」

「たいへんだね。友達が上級生になって、下級生が同級生になつてさ。いじめられちゃうかもなあ。おじさん心配だよ」

「その動画、消せよ」

「そうしてもいいけど、ユウちゃんにお願いがあるんだ。放課後、用務員室まで来てね」

用務員室



「なんだよ、お願いって」

「うん、お願いなんだけどさ、ユウちゃんっていい身体してるよね」

「は？」

「これだけでわかるよね？」

ユウの顔が怒りと侮蔑いっぱいになる。

「無理強いはしないよ。これはただのお願いなんだからさ」

「クソっ！」

「ああ、女の子がそんな汚い言葉使っちゃあいけないなあ。で、どうするの？」

「……一回だけだ。終わったら、ちゃんと消せよ！」

「おじさんのお願い聞いてくれるんだね！うれしいよ！」

「うるさい！」

ユウは服をぬぎはじめた。

「早く済ませろよ」

「ユウちゃん、やっぱりいいからだしてるねえ」

「うるさい！ 早くしろって言ってるだろ！」



「あゝ、JOMAN、いいわあゝ」

すぽぽぽ

くっ♡

「クッ……!」

ぬぽ♡

「ユウちゃん、経験人数は？」

「……………」

「無視かよ。さみしいよ、おじさんは」



「あ、出るわ」

「あつ！ おまえ中で出しやがったな！」

「しょうがないじゃないか。
ユウちゃんのオマンコ気持ちよすぎる
のがいけないんだよ」

「ふざけんな！ キモいんだよ！」

「じゃあもっかいくよ」

「ちよつ、待って！」



1時間後……

あーん
ん

1.0
1.0
1.0

んっ
あ

「もういいだろ……。何回やるんだよ。
もうかんべんしてくれ……」

「じゃあ、明日も来てよ。
それなら今日はお開きにするから」

「わかった、わかったからもう今日は……」

「よし、約束したよ！
じゃあ今日最後の中出しいくぞ！」



「何回やる気だよ！」

「いいじゃないか、もう少しやらせてよ」
「また中にだしやがったな……」



3日目

「上に乗るなんて、彼氏にもしたことはないぞ! あっ……」

「は? ユウちゃん彼氏いるの?」

「いちゃ悪いかな」

「それは許せないなあ」



「オラッ！ 彼氏とどっちがいいか言ってみろ！」

「アッ！ そんなの、彼氏に決まってるだろ」

「何回もイッてるくせにまだそんな」と言っのか。
おじさん悲しいよ



「これでもまだわからないか！」

「あうあう、そんなの、わかるわけねーだろ！
さっさと終わらせろよ」

はぁ、はぁ、
あ、ん、

1.0 1.0 1.0 1.0
1.0
<1/10 <1/10

す、す、す、

「ほーん、ユウちゃん、そんな」と言っちゃった。

ユウちゃんがその気なら

今日はわかるまで帰さないから。

覚悟しとけよ！」

6 時間後.....

「どう？」

「おじさんと彼氏、どっちがいい？」

おじさん

「わかった！ わかりました！」

「おじさんのチンポのほうがいいですっ♡」

ドクッ

びゅん♡
びゅん♡

ビクビク

1.0 1.0

「そうかそうか、ようやくわかってくれたか。
おじさんうれしいよ」



「オラ！ まずは挨拶しろ！」

「おじさんのオチンポ様を
しゃぶらせていただきます♡」

「よし！ ようやくわかってきたな、ユウ」



「上目づかいでな、
ていねいにしゃぶるんだ」

にちッ

「ふあい」



「おっ、いいぞそのまま続ける」



「そろそろ、出すぞ」

「みう、うまいじゃないか。精液は飲んどけ」

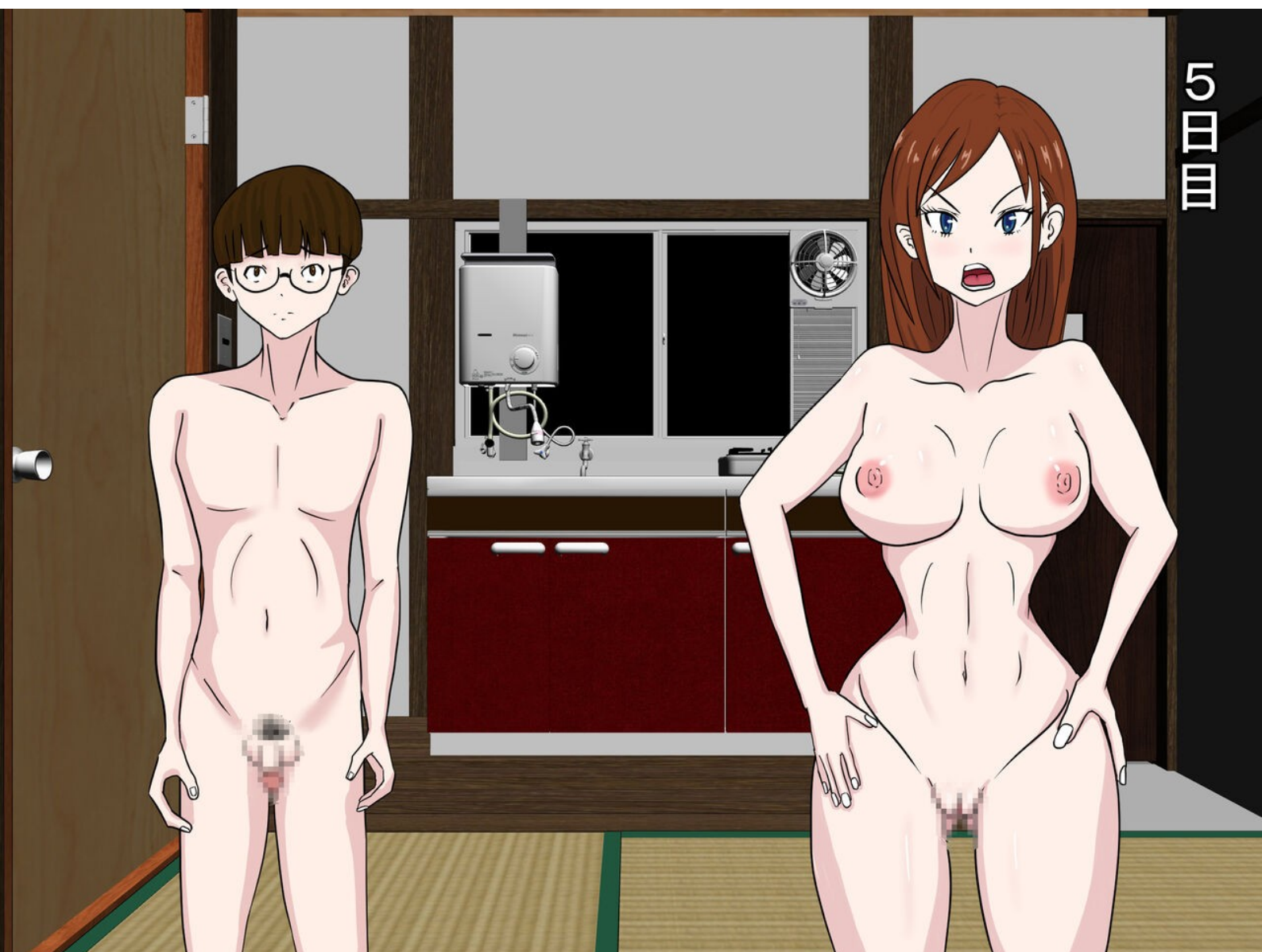
「んっ」



「じゃあ最後にお掃除フェラだ。
マナーだからな。
ちゃんときれいにしろ」



「ふあい……。わかひまひた。
おじさんのオチンポお掃除させていただきます♡」



「なんでおまえがいるんだよ」

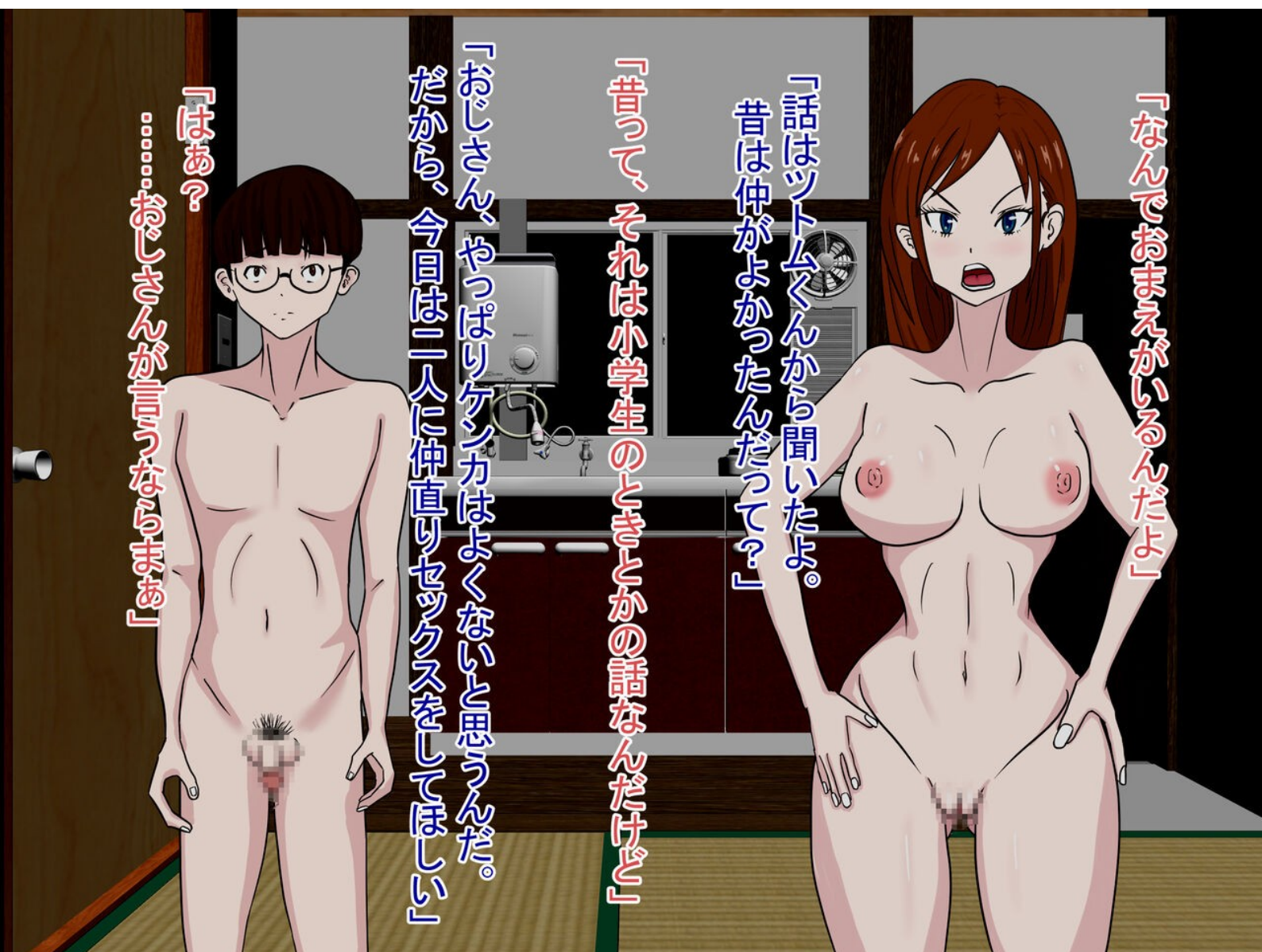
「話はツトムくんから聞いたよ。
昔は仲がよかったんだって？」

「昔って、それは小学生のときとかの話なんだけど」

「おじさん、やっぱりケンカはよくないと思うんだ。
だから、今日は二人に仲直りセックスをしてほしい」

「はあ？」

「……おじさんが言うならまあ」





「おじさんが言うからやらせてやるけど、
おまえを上に乗せるのはイヤだ。
だからこうしてやる」

「わ！」

ぐい/ちゅ

ぐい/ちゅ...
ぐい/ちゅ

ぐい/ちゅ



「あつ！ あつ！ いいです！
ユウちゃんのおまんこいい！
でも、そんなにされたら出ちゃう」

「どうだよ、私のまんこは」

ぐりゅん♡
ぱちゅん♡
ぐりゅん♡
ぱちゅん♡
ぐりゅん♡
ぱちゅん♡
ぐりゅん♡
ぱちゅん♡

「おまえいくのはやすぎだろ。
もつとがんばれよ。
オラオラ！」

「気持ちいいです！
ユウちゃんのおマンコ最高です！」



だらしねえチンポだなあ。
ざゝこ♡
ざゝこ♡
ザコチンポ♡

「あゝ
ざこなんです。ザコチンポなんです。
ごめんなさい！
ごめんなさい！
ごめんなさい！」

「はい、選手交代」

「おっ♡」

「ユウちゃんさあ、ちよつと調子のりすぎ。
チンポに対する敬意ってもんがないよ」



「ザノマン」がなにイキってんの？
まだわかってないのかよオラアツ！」

「あっ♡あっ♡」めんなさい♡」



「どんなチンポにも敬意を持ってザノマン」！
わかったか！」

「はあい♡わかりましたあゝ♡」

「よし！じゃあ一発出すぞ！」



「さあもう一回だ。
ツトム君も気合い入れろ！」

「はい！」

「どうだっ！」「のー」「のー..
気持ちいいかクツマンロ！」

「あッ！いいです♡
おちんぽ気持ちいです♡」

「いっほ♡」



「じゃあ約束しろ。」

これから僕をいじめないって！

ユウちゃんのおまんこ自由に使っていていいって！



「わかった♡わかりました♡
ユウのおまんこ自由に使ってください♡」

「ごめんな、ザコチンポとか言って」

「もういいんだ。」

「僕」そビクビクしてばかりで……」

「よし！じゃあ最後にとことんセックスするか！」



「はーっ♡はーっ♡」

「ツトムくん、気はすんだかい？」

ビクッ
ビクッ

はぁ♡

はぁ♡

「はい！おじさん、ありがとうございました！」



その後、ユウはおじさんとツトム
セフレとなった。
自信をつけたツトムがその後
いじめられることはなかったという。

それを見届けると
おじさんはまだ見ぬわかってない女を
探して、新しい冒険をはじめたのだった。

